

# ルター Luther, Martin 1483 ~ 1546

16世紀ドイツの宗教改革者。アイスレーベンに生まれる。1501年にエルフルト大学に入学するが、シュトットルンハイム近郊での落雷経験をきっかけにアウグスティヌス隠修士会に入り、1507年に司祭となった。1513年以降は、ヴィッテンベルク大学で哲学と聖書学の講義を続けた。

ルターは、1510年から11年に派遣されたローマで免罪符販売によって資金調達を図る教皇庁の腐敗を目撃し、行為でなく信仰による救済の教義を説くようになった。1517年、免罪符は無意味であるとする『95か条の提題』をヴィッテンベルク教会の門扉に掲げ、教皇庁から告訴・破門された。1521年にはこの主張の撤回をヴォルムス国会で求められたが、彼は聖書に拠る以外に自説を翻すことはないと言明した。「ここに私は立つ」という有名な言葉は、この時に述べられたものである。ルターはその間、『キリスト者の自由』(1520)などの宗教改革文書を発表し、1522年には新約聖書をドイツ語に訳して出版するなど、聖書を広く国民に親しませた。

こうしたルターの考えは、『アウグスブルク信仰告白』(1530)をまとめたメランヒトンによって体系化され、ルター派教会の信条となった。ルターは生地アイスレーベンで没し、その亡骸は活動の地ヴィッテンベルクに埋葬された。

## Great Books 19 キリスト者の自由(Von der Freiheit eines Christenmenschen)

ルターの宗教改革三大文書の一つ。1520年8月に出版された『キリスト教界の改善についてドイツ国民のキリスト教貴族に与う』と『教会のバビロン捕囚』の二つの改革文書に続いて同年11月に出版された。前の二書がローマカトリック教会の根幹をなすヒエラルキーと sacrament を批判する対決の書であったのに対し、本書は本来キリスト者とは如何なるもので、どのように生きるべきかを率直に述べた書である。

本書においてルターは、キリスト者はすべてのものに対して「自由な主人」であって、同時に「奉仕する僕(しもべ)」であるという、一見矛盾するような二つの命題を掲げ、この二つの命題は根底で結ばれて一致していると主張した。なぜなら、自由は信仰によって得られ、自由を得たキリスト者はそれゆえに隣人に対して奉仕の愛を持つと考えたからである。そしてルターは、この二つの命題の一致こそがキリスト教信仰の真髄であると述べた。

本書はルターの著作中もっとも愛読されている書で、宗教改革の根本的信仰と思想を簡明に述べた豊かな内容を持ち、キリスト教の精神を理解するには最適の書である。30か条からなるわずか20ページあまりの小冊子であるが、非常に広く普及し、出版された年のうちに数種の版が各地から出版され、その後も数々の翻刻が現れた。また、ドイツ語版とラテン語版で出版されたが、伝統的にラテン語で表されてきた神学概念が、民衆の語るドイツ語でも表されたところに本書の宗教改革的意義がある。

## Key Phrase **キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも従属していない。キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、だれにも従属している。**

キリスト者とは何であるか、またキリストが彼のために確保して与えてくださった自由とはどんなものであるか。

これについては聖パウロも多く書いているが、根本から分かるように、私は次の二つの原則をあげてみたい。

キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも従属していない。

キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、だれにも従属している。

この二つの原則は、聖パウロの次の言から明らかである。第一コリント書九章(十九節)「わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、みずから進んですべての人の奴隷になった」。ローマ書十三章(八節)「たがいに愛することのほか、だれにも何も借りなさるな」

ところで愛とは、その愛する者に奉仕し、また従うものである。だからキリストについても、ガラテア書四章(四節)に、「神はみ子をつかわし、女から生まれさせ、律法に従わせられた」とある。

< 松田智雄(責任編集)『世界の名著 18 ルター』「キリスト者の自由」第一 中央公論社 >

ルターは、キリスト者は「自由な主人」であり、また「奉仕する僕」であるという矛盾を指摘し、これがキリスト者の生き方の原理であるとした。キリスト者の生は信仰のみによって満たされるので律法の行いから自由であると同時に、信仰からおのずとあふれ出る愛の行いへも自由であるとしている。

## ◆ *Great Books* 文献案内

- 📖 宗教改革著作集 第3巻 ルタ - とその周辺 / 徳善義和(ほか訳)  
教文館 1983年刊 503p <190.2R/48/3> 資料番号 12323861
- 📖 世界の名著 18 ルター / 松田智雄(編)  
中央公論社 1969年刊 554p <080/5/18> 資料番号 12784369
- 📖 ルター著作集 第1集 第2巻 / ルター著作集編集委員会(編)  
聖文舎 1963年刊 488、26p <190.8/7/1-2> 資料番号 10299865
- 📖 世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇 第29 / 小平尚正(ほか訳)  
河出書房新社 1962年刊 339p <080/3/2-29> 資料番号 10134625
- 📖 世界教養全集9 / 波多野精一(ほか著)  
平凡社 1962年刊 531p <080/8/9> 資料番号 10135580
- 📖 基督者の自由(岩波文庫) / 石原謙(訳)  
岩波書店 1933年刊 111p <イ190/ル> 資料番号 12252664

## ◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 宗教改革(「知の再発見」双書) / オリヴィエ・クリスタン(著) 木村恵一(訳)  
創元社 1998年刊 174p <230.52GG/101> 資料番号 21040597
- 📖 ルター著作集 第1集 第1~10巻 / ルター(著) ルタ - 著作集委員会(編)  
聖文舎 1963~1984年刊 <190.8/7/1-1~1-10>
- 📖 ルター著作集 第2集 第8巻, 第10巻~第12巻  
/ ルター(著) 日本ル - テル神学大学ルタ - 研究所(編)  
聖文舎 1985~1992年刊 <190.8/7/2-8,2-10~2-12>  
\*「ルター著作集」は現在刊行中。
- 📖 ルターの宗教思想 / 金子晴勇(著)  
日本基督教団出版局 1981年刊 218p <191M/84> 資料番号 10303618
- 📖 ルタ - と宗教改革 / 成瀬治(著)  
誠文堂新光社 1980年刊 247, 10p <234.05M/7> 資料番号 10486314
- 📖 宗教改革の精神(中公新書) / 金子晴勇(著)  
中央公論社 1977年刊 205p <190.23H/14> 資料番号 10296390
- 📖 ルタ - (世界の思想家) / 徳善義和(編)  
平凡社 1976年刊 252p <198.3/17> 資料番号 10313047
- 📖 ルターの人間学 / 金子晴勇(著)  
創文社 1975年刊 576, 20p <198.3/14> 資料番号 10313013
- 📖 青年ルター / E・H・エリクソン(著) 大沼隆(訳)  
教文館 1974年刊 515p <198.3/11> 資料番号 10312973
- 📖 マルティン・ルターの生涯 / フリーデンタール(著) 笠利尚(ほか訳)  
新潮社 1973年刊 497p <190.28E/41> 資料番号 10296978